日文教育資料［生活・総合］

2015
vol. 70

生活&総合navi

CONTENTS

表紙裏 い～め～る　奥村　愛

特集
01 地域からの発信
日本有数の豪雪地帯・
持続可能な町へ未来の扉を開く
～ユネスコエコパーク・福島県只見町の取り組み～

04 ユネスコスクールへの道！
～福島県只見町立朝日小学校の取り組み～　髙原　昇

06 収穫物でクッキング
ホットプレートを使って簡単クッキング！ 2年　古門幹恵

08 論壇　樹木の生き方を知ろう
－身近で貴重な教材に－　石井誠治

12 連載　おしえて！藤井先生　藤井千春

研究と実践
13 （生活）気付きをもとに考え，表現できる子どもの育成
～気付きをもとに思考する手立ての工夫と，
気付きをもとに話す適切な場の設定～　田代宗輔

16 （総合）教科間連携を意識した実践
～4年　平和学習を中心に～　北谷翔太

19 連載　ナカヤマヒロシのてだてだ⑰　中山洋司

20 連載　幼・保・小スロープ⑩
のあ保育園（山口県下関市）／和田信行

22 連載　特色ある実践を求めて　村川雅弘

24 生活・総合への提言　近藤まり

26 ご当地料理紹介　佐伯こまだしうどん　岩崎裕祐

27 わが町オススメ行事　どんど焼き　林田堯瞬

いろいろ工夫して！
28 （まとめ編）大好き！わたしたちの町！見て見て！
発見がいっぱいだよ　青柳仁美

30 資料館へアクセス　御食国若狭おばま食文化館　中田典子

わたしの学校の特色
32 北海道札幌市立南月寒小学校　中井早江子

裏表紙 連載　Dr. 小林のこれなあに？　小林辰至

未来をになう子どもたちへ
日本文教出版

日文の実践事例、教科情報
詳しくはWebへ！ 日文 検索

natsuko

い～め～る

ⓒWataru Nishida

O K U M U R A　A I

奥　村　　愛

ヴァイオリニスト。
７歳までアムステルダムに在住。桐朋学園大学ソリスト・ディプロマコースで学ぶ。日本音楽コンクール第２位，他受賞多数。国内外の多数のオーケストラと共演を重ねている。最新 CD は 2013 年 11 月発売の「With a Smile ～微笑みをそえて」。
親しみやすいプログラムと自然体なトークによるリサイタルが大好評を得ている。一児の母としての経験を生かし，自らのプロデュースによる親子向け公演を数多く手がけている。
桐朋学園芸術短期大学非常勤講師。佐藤製薬のトータルスキンケアブランド「エクセルーラ」のイメージキャラクターを務めている。
公式サイト http://aiokumura.jp/
公式 Facebook ページ
https://www.facebook.com/aiokumuraofficial

音楽に親しみ，心の豊かな人に

小学校2年生までオランダに住んでおり，そこでは現地の小学校に通っていました。日本に帰国し，いざ小学校に通い始めると，まるで別世界に来てしまったと感じました。友だちが思っていることをあまり口に出さないのです。授業中，先生が質問すると，オランダではみんなが一斉に手をあげ，発言したくてたまらないという雰囲気なのですが，日本では当時，自分から手をあげる人は少なく，だけどみんな答えは知っているということがとても不思議でした。そのことをあまり考えず，わりと手をあげていたら，先生に，「奥村さんはいつも当てているから別の人にしますね。」と言われたのが子ども心にとてもショックでした。そのような状況の中，自分のことを信じてくれる先生がいたことが，一番の支えになりました。ですから先生方には，子どもを信じることをいつも心に留めておいてもらえたらと思います。

家庭では，父がヴァイオリニスト，母がピアノ教師の仕事をしていたので，楽器を奏でることは自然なことで特にためらいもなく，4歳から始めました。当時はヴァイオリンとピアノの両方を習っていましたが，二つの楽器を同時に習うのは大変なため，先生に付いていたヴァイオリンを習うことになっていきました。

わたしは自然な流れで楽器からクラシックに親しみを覚えましたが，ヴァイオリンに限らず，クラシック自体が敬遠されがちなため，もっと身近に感じてもらえたらと思っています。おそらく音楽なしで人生を終える人はいないでしょう。若いうちから「クラシック好きなんです!」という人が少しでも増えればと期待しています。わたしはヴァイオリンという，一つのことをずっと続けて来たからこそ，今の結果があるのではないかと思っています。一つのことを，長年どんなことがあっても辞めずに続けてきたというのは，とても自分の中で自信になっており，若い世代の人や子どもたちも，一つ夢に向かって打ち込んでいけるものを見つけて，自信をもってもらえればと思います。

また，子どもの頃に，外で遊んだり，友だちとけんかをしたり，いろいろなものに触れ合ったりしたことで，感性が養われました。特に音楽は，感性を養う上で非常に有効だと自分の経験上感じています。ですので，クラシック音楽に限らず，子どもたちが音楽を聞いて，心の豊かな人に育ってくれることを願っています。

特集 地域からの発信

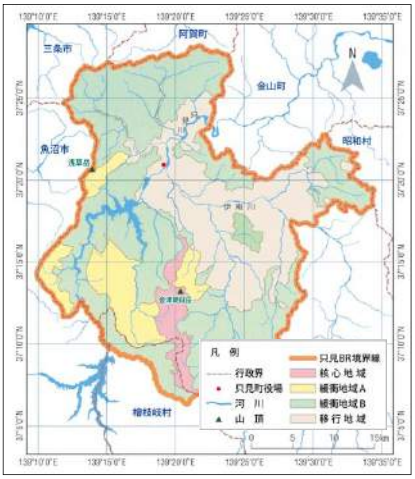
日本有数の豪雪地帯・持続可能な町へ未来の扉を開く
～ユネスコエコパーク・福島県只見町の取り組み～

昨年，ユネスコESD世界大会が岡山市と名古屋市で開催されました。また，只見町がユネスコエコパークに登録された年でもありました。そこで今回は，只見町教育長の齋藤修一先生を中心に，只見町教育委員会の方々に話を伺いました。

齋藤 修一
只見町教育委員会 教育長

ユネスコエコパークって何？

生態系の保存とその持続可能な活用を目的に，ユネスコが行っている事業です。世界共通的な用語だと，ＢＲ(Biosphere Reserves＝生物圏保存地域)と言います。日本では，この取り組みをいかに定着させるかという観点から，ユネスコエコパークと呼ぶようにしています。その一地域として，昨年，只見町全体と檜枝岐村の一部が一つの生物圏保存地域として登録されました。只見町がなぜユネスコエコパークとして世界的な認証を得たのかというと，豪雪に特徴付けられる自然豊かな環境が残されていることや，そうした自然と人間が共生し合って生きてきた，その生き方や伝統，文化などが世界的に認められたからです。



▲只見ユネスコエコパークの概要

只見町ユネスコエコパークについてもう少し説明しましょう。まず，対象地域は大きく三つに分かれます。真ん中が核心地域として自然を完全に守っていく地域，その外側が緩衝地域として自然について学術研究をしたり，教育・研修をしたりする地域，さらに一番外側には移行地域があり，ここは人が自然環境に配慮して経済活動を行っていくところです。以上のような土地利用区分により，人と自然との共生を実現します。ではなぜ，町はそういった取り組みをするのでしょうか。今までの町づくりは，いかに東京に近づくか，あるいは大都市のような大発展をするかということを目標にしてきた経緯があります。しかし,「本当にそれが，わたしたち町民の豊かな生き方につながるのだろうか」と考えたときに，単に都市部に追従していく地域づくりとは決別して，人と自然が共生しながら豊かに生きていくことのほうが大事なのではないかという結論に達しました。その表れの一つが，ユネスコエコパークへの登録です。

只見町におけるユネスコエコパークの特徴

現在，日本に登録されているユネスコエコパークは七つあります。その中において，只見町の特徴は，豪雪地帯だということです。１月下旬から節分の頃には，だいたい２～３メートルくらいの積雪になります。その雪がもたらすものは何でしょうか。豊かな水です。そこで米づくりへと考えが及びます。その豊かな只見

町の自然には雪食（せっしょく）地形という，樹木が茂らず岩肌が出ている地形があります。雪食とは，文字通り雪が食べる地形のことです。つまり，非常に急峻な山に雪が降り，春先に雪崩が起き，雪が表面を食べたような形になり，岩肌が顔をのぞかせるのです。このような現象は世界中探してもあまり見られません。この雪食地形によって，只見地域の山岳景観は非常に急峻で複雑になり，様々な立地環境が形成されています。また，尾根，斜面，平坦地，谷沿いといったところで生育する植物が異なり，これを「モザイク植生」とも呼びます。このように，雪という自然現象がもたらす地形や植生が，只見ユネスコエコパークにおける自然環境の特徴です。

ユネスコエコパークは貴重な自然環境が存在することはもちろんですが，そうした自然環境と共生する地域社会が存在することも重要です。只見町では雪を代表とする自然環境が，そこに住む人々の生活に大きな影響を与え，独自の生活・文化を育む背景となってきました。歴史的にみて，只見地域の住民の生活基盤を支えてきたのは，焼畑を含んだ農業に，地域の豊かな自然資源を拠り所とする狩猟，山菜・キノコ類の採取，燃料となる薪材生産，用材生産，漁労などです。こうした営みは地域の慣行に従い，持続可能な形で行われてきました。また，年中行事のオンベ（サイノカミ），伝統芸能の早乙女踊りや太々神楽の文化的活動も行われてきました。こうした伝統的な生活・文化は，現在でも続けられています。

▲モザイク植生

地域の否定から地域への愛へ

ここ只見において，将来にわたり地域を愛し，地域を支える人材をどう育てるか，そういう教育をしていかなければいけないという考えからＥＳＤ教育への発想が生まれ，ひいてはESD教育の推進拠点であるユネスコスクールに取り組む必然性が出てきました。

昨年，「日本では，2040年までに市町村の半分近い896の自治体が人口減少の結果，消滅するだろう。」というニュースが流れました。とても衝撃的でした。只見では今まで，「こんなに雪の多い只見で生活をしていたらダメなのだ」と言って親や大人の生き方を暗に否定し，そして地域も否定し，子どもたちはその中で育っていたので，当然ながら「ここにいてはダメなんだ」という考えに至り，東京などの大都市に出ていきました。しかしこれからは，自分の地域，自分の生き方を誇れなければいけません。今後，「誇り教育」にどう転換していくかが町として大きなカギとなっています。

只見町が取り組むユネスコスクール

長谷部 千晶
ユネスコスクール担当

小・中学校では，すでにユネスコスクールへの取り組みを進めています。町内には，三つの小学校と一つの中学校があります。まずは先頭を切って25年度に，朝日小学校でユネスコスクールへの申請に向けて取り組んでもらい，その結果，平成26年10月にユネスコ本部より認定をいただくことができました。平成27年１月には，認定を記念して授与式とともに公開授業発表会も行いました。

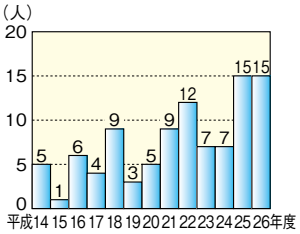
残りの只見小学校，明和小学校，只見中学校でも申請の準備を行っており，いずれはすべての学校がユネスコスクールになることを期待しながら，進めています。

極上の自然留学

前述した，地元の子どもたちが地域を支える人材に育ってもらう取り組みと双璧を成しているものとして，「極上の自然留学」があります。ここ只見町に高校は，福島県立只見高等学校だけです。只見高校に入学する子どもたちは，近くにある只見中学校からの生徒しかいません。近年の少子化とも相まって，地元の

酒井 文高
極上の自然留学担当主査

生徒数は減っています。すると当然，高校の存続ということも大きな問題になってきます。存続していかないと，この只見の地域で高校教育を受けられる環境が失われてしまいます。それはどうしても避けなければならないと考えています。そのため，町外から絶対数を確保することが大きな命題になりました。来てくれた町外からの生徒たちには，第二の故郷として只見町の応援団になってもらいたいという思いもあります。高校生として只見に留学して只見を知り，そして只見を好きになってもらうことが大切です。やがて地元に戻った時，只見のことを思い出して，米をはじめ，様々なものを買ってもらえるような，そういった消費者になってもらえたらと思っています。あるいは，只見への観光リピーターになってもらったり，やがて親となりその子どもも，極上の自然留学を体験してもらったり，願わくは，都会で会社を興したとき，支社を只見につくってくれたり，あるいは町に永住してくれたりとなれば，最高の，そして非常に大きな応援団ということになるのだと思っています。



▲只見高校への留学生の推移

極上の自然留学って何？

只見高校に通う生徒のための支援制度として，町で寮（奥会津学習センター）を運営しており，そこに入寮して高校生活を送ることが基本的内容です。ではなぜ極上かというと，一般の学校ではなかなか行っていないような，様々な町からの支援の仕組みが整えられているからです。第一に，個別指導が非常に充実しています。その一つとして，大手進学塾と連携して通信教育を行っていることがあげられます。また，キャリア教育として，著名な講師陣を招き講演会を行ったり，企業についての研修をしたり，近所の経営者による企業ガイダンスを行ったりしています。中でも特筆すべきは，イギリスへの短期留学（約二週間）を実施していることです。毎年２名の定員ですが，保護者負担は10万円で，そのほかはすべて町で負担します。

第二に，都会では味わえないような自然体験ができます。ブナ林の散策だったり，雪上スポーツであったり，川下り（ラフティング）やカヌーだったりと，それらが無料で体験できるようになっています。

さらには，部活動の遠征費について，交通費や宿泊費を，地区大会では半額，県大会では七～八割，東北大会以上だと全額補助しています。

前述しました寮には，一昨年から総務省が行っている地域おこし協力隊という制度（大都市圏の人口増加地域から，若者を地方に移住させる取り組み）を利用し，町の職員として寮で生徒たちと寝食をともにし，指導・相談する者を置いています。

留学の実情～只見教育振興協力隊からのメッセージ

わたしは，以前は東京の企業に勤めていました。そのこともあって，社会人になった時に必要となる能力とは何かを生徒たちに伝えたり，中学・高校の教員免許状をもっていることから，学習や生活指導をしたり，さらには，親元から離れ，寮の中で集団生活をすることで抱える生徒たちの悩みや不安の相談にのったりしています。また，離れて暮らしている保護者に向けて，広報紙を月に1回発行，送付しています。

末谷 広大
只見教育振興協力隊

さいごに

地域づくりは，最終的には人づくりです。今後は社会教育，及び生涯学習といった面も含めて，町民の豊かな心を育てていきたいと思っています。皆さん，是非一度，只見町へ来てみてください。

ユネスコスクールへの道！
～福島県只見町立朝日小学校の取り組み～

髙原 昇　教頭

●只見学へのアプローチ

本校のESD教育は,「只見愛」の育成そのものです。平成26年度只見町立朝日小学校経営ビジョンの中に，教育目標とともに「只見愛」を掲げています。そのことからも「只見愛」の育成が本校教育の柱になっていることがわかります。内容は，自分に自信をもち，家族や地域に誇りをもち，夢に向かって学び続ける児童を育成することです。ユネスコエコパークとして評価された只見町のよさを子どもたちに体験させ，理解させて，そのよさをどう継承していくのかを,自らの生き方と関連させながら学習していく教育です。これを「只見学」と名付け，生活科と総合的な学習の時間を使って活動しています。その中で,「農業がとても面白かったので，わたしもやってみたいです。」という児童の発言がありました。このように，体験を通して得られた感情はとても貴重です。そういったところを，先生が，そして家庭でほめて励まして伸ばしていく，これが只見愛なのです。おかげ様で，朝日小学校は，全国学力テストにおいて，全国平均よりもかなり高いところに位置することができました。恐らく自分に誇りをもつことで，他の部分も伸びてくるという相乗効果の表れではないかと考えています。

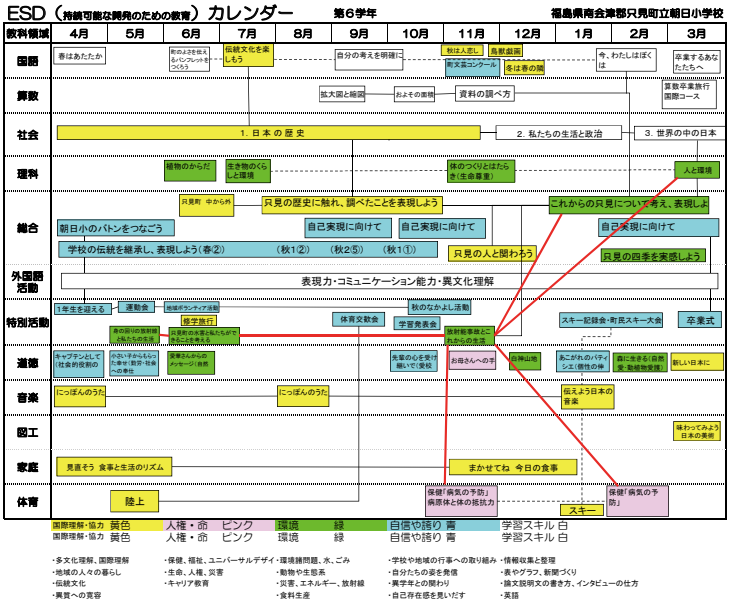
▲朝日小学校経営ビジョン

また，具体的な内容の一つとして，地域振興センターとタイアップし，防災教育の一環で実施した「災害学習列車」の活動があります。2011（平成23）年７月29日，豪雨によりＪＲ只見線の一部である会津川口駅から大白川駅までが甚大な被害を受け，今も不通のままになっています。そのことについて，ゲストティーチャーを招いて当時の様子について話を聞き，休日に代行バスに乗り，鉄橋が落ちたり，線路が寸断されたりしたところを見学しながら，そのすさまじい状況を学習するというものです。児童が感じたことは，災害への備えを怠らず，いつでも避難できるようにしたい，災害の情報を収集しやすくしたいといったことでした。６年生の児童は,「防災に対して積極的な気持ちになることができた」と言っています。これが朝日小学校のESD教育，すなわち只見愛だと考えています。

▲災害学習列車の授業の様子

●年間指導計画を教えて！

1，2年生における生活科での地域学習，3，4年生では只見の自然と人間，5年生では只見の食と農，6年生では只見の歴史と未来を縦軸におき，6年間を通して暮らす，食べる，生きる，自信や誇りをもつ，ということを横軸とした構想です。只見学を通して，自分たちの今置かれている現状をしっかりと認識させ，只見の地域社会，自然環境，歴史への理解を促し，只見町に対する深い愛着を育んでいく基礎を培っていく活動をしています。



▲年間指導計画（ESDカレンダー）　第6学年

●実際の授業展開は？

生活科・総合的な学習の時間での只見学を中心におき，「自分に自信をもつ」，「家庭や地域に誇りをもつ」，「あきらめない心で努力する」といった心情を育み，発展的・横断的に指導できるよう他の単元を関連させました。また，「自己の生き方」学習では，他教科や地域の行事との関連をふまえ，「つなぐ」をキーワードにしています。その「つなぐ」ことを大切にしながら，目標に向かって主体的に取り組める活動を展開することで，自分に自信をもち，只見への誇りをもつことができるようにしました。只見学を中心として，問題解決型の学習活動を設定していることも特徴の一つです。そして，各教科・道徳・特別活動や課外活動等，すべての学校生活を関連付けさせ，自己実現の場としています。

❶朝日小のバトンをつなごう
❷運動会を盛り上げよう
❸「チーム朝日」あきらめない心で頑張ろう
❹只見町 中から外から見てみよう
❺只見の歴史に触れよう
❻わが家の歴史をさぐろう
❼これからのわたしたちと只見町

▲只見愛を育む実践の概要

▲朝日小のバトンをつなごう
6年生が，最上級生として学校の伝統を継承し，表現する実践。

●実施する上での工夫や注意点

子どもたちの知（確かな学力），徳（豊かな心），体（健やかな身体）という基礎の上にＥＳＤ教育が成り立っていることを，絶えず念頭に置き，実践していくことが大切だと思っています。

また，研究のための研究にならないようにすることに注意を払っていくことを心がけています。

ホットプレートを使って簡単クッキング！

2年

古門 幹恵（岡山県岡山市立牧石小学校　指導教諭）

1 はじめに

本校の２年生は，生活科の学習において，様々な野菜を栽培している。子どもたちは，野菜に実がなることで，栽培への意欲が喚起され，生長が楽しみになっていく。

１年生のときにアサガオを育てた各自の鉢で，ミニトマト・シシトウ・ピーマン・オクラ・ナスなど，自分が育てたい野菜を苗から育てた。学年園には，ジャガイモ，トマト，ピーマン，ナス，ポップコーンなどを植えた。それらの野菜を使って，２年生でも比較的簡単につくることができて，楽しめるクッキングをした。

2 栽培活動のポイント

★鉢植えは，しっかり根がはるように，鉢に牛乳パックを切り開き，差し込んで鉢を深くし，土がたくさん入るようにする。

★学年園は，黒マルチシートを活用する(黒マルチシートは，雑草を抑制し，地温の上昇や抑制，水分の蒸発を防ぐなどが期待できる優れものである。これを活用すると，トマトやピーマンなどは，２学期でも十分に収穫ができる。)。

★ポップコーンは，食品売り場でポップコーン(食用)をつくるために販売しているものを種として使った。ポットに２～３粒ずつまいて，苗をつくってから植えた。

ポップコーンは，一袋200円程度で購入でき，たくさん入っているので気軽にチャレジができる。しかも，夏休みの間そのまま放置しておくことができ，２学期に，立ち枯れ状態になってから収穫しても問題がない。

収穫後は，風通しのよいところでさらに乾燥(放置)させ，実をはずしておく。

3 ホットプレートで簡単クッキング

その１　夏野菜たっぷり　ぎょうざピザ

① お皿に，ぎょうざの皮を置く。

② ピザソースをうすくのばしてぬる。

③ 収穫した野菜（ピーマン・ミニトマト・ナスなど）を切り，その上にのせる。

④ チーズをのせる。

⑤ ホットプレートにのせてふたをして，チーズが溶けたら完成！

⑥ 野菜だけでも，簡単でとってもおいしいぎょうざピザができた。

その２　ジャガイモもち

① ジャガイモの皮をむく。

② ６～８片に切り，やわらかくなるまでゆでる。(レンジを使ってもOK！)

③ うすく切って，片栗粉と合わせ，ビニル袋を使ってつぶし，丸めて小判型にする。

④ ホットプレートで，両面にこげ目がつくくらい焼く。

⑤ フライパン(鍋)に，しょう油・砂糖を入れて，煮詰め，水溶き片栗粉でとろみをつけて，みたらしあんをつくる。

⑥ ジャガイモもちに，みたらしあんをのせて完成！

その３　ポップコーン

① ホットプレートに，油(バター)を引き，平らになるように，ポップコーンを入れる。

② ふたをして，しばらく待つ。(ガラスのふただとはじける様子が見えて楽しい。)

③ 音がしなくなったら，ふたをあけて，塩をふって，完成。(簡単！)

④ おわりに

自分たちで育てた野菜を収穫して，それを使ってつくった食べものの味は，格別である。２年生の子どもたちは，お手伝いも大好き。畑でとれた野菜を使ってのクッキングに興味津々で取り組んでいた。また，収穫後の野菜を抜いた畑を見て,「次は何を植えるの？」と栽培にも目を向ける子どもたちも見られるようになった。

ぎょうざピザは，１学期の終わりにつくったが，畑のミニトマトやピーマンは，２学期にもたくさんとれ，秋にもクッキングが可能である。

ジャガイモもちとポップコーンは，夏休み前に収穫したジャガイモと，９月に収穫して乾燥させておいたポップコーンを使って，11月につくった。

特にポップコーンは，種も安上がりで，たとえできが悪くてもそこそこ実がとれ，夏休みをはさんで２学期に，簡単に，しかもおいしく食べることができる食材である。是非ともお試しいただきたい。

論壇

樹木の生き方を知ろう
ー身近で貴重な教材にー

石井　誠治

樹木医。森林インストラクター東京会会長。環境カウンセラー。東京樹木医プロジェクト理事。
主な著書には,『樹木ハカセになろう』（岩波ジュニア新書),『都会の木の花図鑑』（八坂書房),『大人の樹木学』（洋泉社新書）がある。子どもから大人まで，身近な自然に目を向けてもらう活動が好評。

1　鶴岡八幡宮の大イチョウ

・倒れる前から傾いていた

鎌倉時代からご神木だったと言われる大イチョウが2010（平成22）年３月10日，突然倒れました。場所は，鶴岡八幡宮境内の階段脇です。下の有りし日の姿は，倒れる１か月前の写真。よく見ると傾いているのがわかります。

すでに重心は幹からはずれていたようです。倒れる前の写真をよく見ると，健康状態が透けて見えてきます。まず枝ですが，しめ縄の上には細かい枝が多く出ています。その上に幹が見え，太い枝がありますが，太い枝から伸びる細かい枝が少ないと思いませんか。倒れてわかったことですが，しめ縄の上に出ている細かい枝は根元周囲に伸びた細い根から水分を供給されていた枝なのです。直径２メートルもある幹ですが，内部は腐朽していて空洞だったため，樹体を支える太い根はすでに腐っていました。巨大なイチョウは，幹の周囲から伸びた細い根で，下のほうにある枝の葉を茂らせていたのです。

では，上の枝はどのようにして水分を得ていたのでしょうか。上の枝に水を主に供給していたのは，腐朽して空洞となった幹内部から伸びて地面に達した不定根という根であり，ホースのようになって水分を吸い上げていたようです。倒れる寸前の大イチョウは，大きな樹体を支えるしっかりした根が腐朽して減り，細かい根でかろうじて支えられていたのです。

・千年を生きるということ

イチョウが文献に登場するのは鎌倉時代以降です。イチョウは万葉集に一首も歌われていないことからもそれがわかります。そのため，倒れたイチョウは，中国から種を持ち帰った僧侶がまいた実生（みしょう）苗（なえ）（種から育てる苗のこと）の可能性があります。日本にない珍しい木のため，ご神木として大切に育てられたのでしょう。それが，各地に大木が残っている理由です。管理がよければ，倒れた株のように千年近く生きるのです。

・生きた化石の意味

現在見られる樹木の中で，最も古い形質を残しているのはイチョウです。独特の葉の形は，葉脈が二叉分枝を繰り返して横に広がった形になっています。まさに，植物が海から上陸して地上に分散していく時代の特徴を残しているのです。針葉樹よりも起源が古く，分化した仲間はすでに絶滅し，イチョウのみが現存しています。これが生きた化石と言われる所以なのです。

写真中央は，ラッパのように丸まったイチョウの葉

・ギンナンは銀のアンズ

イチョウは漢字で「銀杏」と書きます。中国では「公孫樹」。成熟が遅くて，実が成り始めるまで25年ほどかかるため，「孫」の字が入ります。ゆえに「銀杏」とはギンナンのことであり，木ではなく実に対する表記なのです。

また，中国ではアンズの核を「杏

仁」と言って，薬用として珍重しています。「杏」の種は梅干しの種に似て表面が褐色ですが，「銀杏」は白くてツルンとしています。ギンナンにも薬用効果があるため，「銀の杏」と呼ばれたのでしょう。学名はギンナンをラテン語で標記し，「*Ginkgo biloba*」と言います。

2　がんばれナラの木

・OAK はナラ？カシ？

前号の論壇を書かれた高槻氏は，「The Oak Tree」という詩を訳され，「がんばれナラの木」というブログの中で，東日本大震災で被災された方を励ます活動を行っています。各地方の方言に替えて朗読されているブログは，一聴の価値があります。

さて，そのナラの木ですが，東北地方のナラは，「ミズナラ」の和名で親しまれています。英語でOAK と言えば「樫」と訳されますが，実態は「楢」。特にヨーロッパの OAK は,「オウシュウナラ」と呼ばれ，実は，日本のミズナラに近い種類なのです。

・雑木林ができるまで

関東では，ナラと言えばコナラです。薪炭林（しんたんりん）の主役です。江戸時代に樫の森が開墾され，コナラやクヌギが中心の林に樹種変換されたためです。

関西では，平安時代から周囲の森が切られてアカマツ中心の二次林が薪炭林として成立しました。ゆえに，マツタケが採れるようになったのです。

戦後のエネルギー革命により石油がエネルギーの中心になる以前は，コナラやクヌギ，マツなどの雑木林が生活を支えていたことがわかります。

・落葉と常緑

樹木には，冬に葉を落として寒さと乾燥に耐える樹木と，冬でも葉を付けている樹木があります。冬に落葉する性質は，乾季に葉を落とすほうが有利なあたたかい環境で身につけたと言われています。落葉すれば寒さにも耐えられますので，寒い環境まで分布を広げられたのです。なお，いつも葉を付けているように見える樹木でも，１～３年で古い葉から落葉しているのです。葉がない時期がないため,常緑と言われる所以です。

・根の役割

「がんばれナラの木」の詩の中で，強い風に枝や葉を吹きちぎられても立ち続けるナラの木は言います。

「いくら風が強く吹いても根まで吹きちぎることはできない」と。

土の中に伸びる根は見えないために実態があまり理解されていません。根の重要な役割は，樹体をしっかり支えること，そして養水分を吸収して葉や樹体に供給することです。

木の調子が悪くなる原因の多くが，根の障害です。根に目を向けることが，木を知る近道なのです。根の先端は，常に生長しながら養水分を取り入れる仕事を続けます。伸びている先端の若い根が，水分を吸収します。若い根の表面からは，細い根（根毛）が伸びており，養水分を集めやすくしているのです。

多くの木は菌根菌と共生して，より広く必要な肥料分を集めます。菌にはお礼に,光合成産物（デンプン・糖）を与えています。そして，古い根は樹体を支えるのが仕事になります。根は枝のように分かれて広がることにより，表面積を広くしています。土との接触面を広げることで土をつかむ根の役割が強化されるのです。

3　葉について考えよう

・木は死んだ細胞の塊

100 年生きた木の根元付近の年輪は，100 本あることになります。そして生きている細胞が集まっているのは，秋期では樹皮の内側，形成層のある年輪のもっとも外側の部分です。生きている細胞は師部（養分の通路となるところ）と柔細胞（貯蔵・分解・分泌などの生理作用を営む細胞）が中心で，全体の１～２％ほどです。そのため，木部の大部分は死んだ細胞なのです。例えばナラの木は，水が吸い上がる導管が太くはっきりしていますが，実は導管の細胞は死んでいるのです。中身が抜け，水の通導が可能になった細胞の連なりなのです。

動物は生きた細胞の塊ですが，木は生きてきた証を残し続ける死んだ細胞の塊なのです。死んだ細胞は木部となって樹体を支える役目をします。木部が詰まっていれば，樹高が高くなっても，強い風

が吹いても，幹が傾いても，耐える力が持続します。そのため，木部の中心では，生きた細胞の老廃物を抗菌物質に変えて貯蔵し，詰まった状態を保っているのです。なお，抗菌物質は褐色になることが多いので，心材は褐色になりやすいのです。人は，木材として心材の部分を活用します。乾燥させて使用すれば，世界最古の木造建築である法隆寺・五重塔の心柱（しんばしら）に使用されているヒノキのように，1400 年も立ち続け，強度を保つことができるのです。

・葉の付いた枝の樹齢

落葉樹では，葉が付いている枝は今年の春から伸びたものです。秋に散るときには，葉の付け根に次の芽があります。

上の桜の枝の写真のように，プックリしている芽は花が入っている花芽，尖っていたら葉芽です。芽は通常，芽鱗（がりん）（芽をおおって保護するうろこ状の葉）に包まれ，寒さと乾燥に耐えています。

前述したように，常緑樹では葉は２～３年は付いていますが，新しく活力のある葉は今年伸びた枝に付きます。

・生きた細胞は捨てられる？

葉は，木の中でも生きた細胞の塊です。葉には気孔という穴があり，空気が流通しています。その空気から光合成のために炭酸ガスを取り入れているのです。そのとき水分は，水蒸気となって葉から出ていきます（蒸散）。天気がよくて蒸散が活発だと，根からの水分補給が間に合わず，水ストレス（不足）状態になります。これが葉のしおれです。

今年伸びた葉は５月から７～８月まで盛んに光合成を行います。秋になると活力が低下し，落葉樹は老化してくる葉を捨てる準備を始めます。落葉する前に葉緑素が分解され，赤や黄色に発色します。これが紅葉現象です。木において，生きた細胞からなる葉は，仕事が終われば捨てられる運命なのです。

・葉は精密な化学工場

木は，根から吸い上げた養水分と炭酸ガス，太陽の光のエネルギーで光合成を行い，生きるために必要なものをつくり出しています。葉がつくる有機物は，常温常圧の環境下において人間の手ではつくり出せません。葉は精密な「化学工場」のようなはたらきをしているのです。よって，わたしたち動物の生存は，植物の有機物生産に支えられているということが言えます。

モミジバフウの葉

4　校庭の木々は身近な教材

・サクラは花咲く時だけにあらず

校庭に植えられたサクラは，花が咲く時こそ存在感があります。特にソメイヨシノという品種は，接ぎ木苗という手間をかけているクローンのため，花時が揃います。花が葉より先に咲く性質が，枯れ木に花咲く風情を演出して，豪華で美しく，卒業式や入学式の思い出とも重なります。だから春になると，改めて身近にこんなにもたくさんのサクラがあったのかと思わせるのです。

ソメイヨシノの花

花が話題になる一週間は夢のように過ぎ去り，サクラは忘れられてしまいます。さてここで，サクラの生き方をおさらいしてみましょう。最近では，春に咲くサクラだけでなく，秋に咲くサクラも話題となっています。もともとサクラの発生は，中国の雲南省あたりではないかと言われています。雲南省から西をめざしたサクラは，ヒマラヤ山脈の南斜面，標高 2000 m付近をたどり，ビルマ，ブータン，ネパールに広がっていきました。花はピンクの大輪が咲き，蜜が多く，ヒマラヤザクラと言います。そして，東をめざしたサクラは，氷河期に大陸とつながっていた日本にまで分布を広げました。温帯域に広がったサクラは，寒さに当たらないと花が咲き始めない性質を獲得したため，冬を経て，春に咲くようになりました。

日本では，四季の変化とともに

北海道から沖縄まで，多様な環境があるため，花の種類が分化していきました。それが，江戸時代の参勤交代制度により，江戸へ各地のサクラが集合します。そこで交雑が起こり，品種が増えていきました。その後，明治維新の混乱で品種は減少しますが，戦後の復興の中で，サクラはシンボルとして復活を遂げます。

秋に咲く品種は，雲南省で秋に咲き，初夏に実っていた性質が現れたものだと考えられています。ヒマラヤザクラは現在でも 12 月に咲き，６月に実が熟します。花時のみならず，実や葉，枝ぶりや芽など，身近な教材としてのサクラをもっと有効に活用すべきだと思います。

・葉がないときこそ観察のチャンス

落葉樹は，葉が落ちているときは枯れているように見えます。枯れた枝は，指で挟んで折り曲げてみると簡単に折れます。生きた枝は曲げてもすぐには折れません。生きている細胞は柔軟なのです。サルスベリやプラタナスのように樹皮が薄い木の幹は，爪を立ててこすると，緑色の木部が現れます。幹でも光合成をしている証拠です。枝の付き方や枝ぶりも，葉がないときのほうがよくわかります。また，サクラの花芽も葉がないときのほうが見極められます。

・さわってみることの大切さ

校庭の樹木は人が植えたものが中心です。そのため，入手しやすい樹種なので，珍しい木はあまり見当たりません。おなじみの木だから，観察するにはふさわしいのです。しかし，現在の教育で最も不足しているのは，実体験に伴う情報です。

近年では，スギやヒノキは実態が知られずに，花粉症の原因ばかりが取り沙汰されています。例えば，身の回りで使われている線香は，スギからできています。緑の色はスギの葉を粉にしたためです。実際，スギの葉を燃やすと線香の煙と同じ香りがします。広葉樹の葉もさわってください。大半の葉は，表はつるりとしていて，裏は毛を感じます。表面は雨をはじきやすいように*クチクラ層が発達しています。裏面は気孔が多いので，余分な水分が入るのを防ぐために毛が生えているのです。もちろん，樹種によって手ざわりはまちまちです。だからこそ，手の感覚を使って周囲の自然を個体差として体感することができるのです。目に頼って情報を得る教室の中の授業では得られない，実感のこもる体験です。これも近くにある有効な教材の活用でしょう。

エドヒガンのシダレ　愛称「大糸桜」

・なぜ動かないか考えてみよう

動物は，環境が悪くなれば移動します。では，植物はどうでしょう。校庭の樹木は動きません。子どもたちと，なぜ動かないのかを考えてみましょう。答えは簡単です。動く必要がないからです。

動物は餌を求めて移動するため，大変なエネルギーを使っています。移動が必要だから身体全体を常によい状態に維持しなければなりません。つまり日々，身体をつくり替えなければ生きていけないのです。樹木はと言えば，生きている部分の割合が樹齢を重ねるたびに少なくなるような生き方ができるため，何百年もの樹齢を獲得できるのです。死んだ細胞と言っても，木部は有機物の塊なので栄養がたっぷりです。そして，昆虫やキノコの命を支えているのです。動かないことの最大のメリットは，極めて少エネルギーで生活できるということです。「亀は万年」と言われるのは，動物の中でも活性が低く少エネルギーで生きられるからなのです。樹木の生き方は，はるかにその上をいっています。屋久島の縄文杉が二千年，北アメリカにあるセコイアの巨樹が三千年，まさに木の生き方のすごさを体現しています。

・体験に勝るものはなし

生活科や総合的な学習の時間の授業は，最も体験活動ができ得る教科等であり，その大切さを学べます。是非，子どもたちの実体験の機会を増やし，気付きの幅や課題への発想力を広げてください。

＊クチクラ層
表面をおおう層で，水分の蒸発を防いだり内部を保護する役割を果たしたりしている。

おしえて！ 藤井先生

藤　井　千　春

早稲田大学　教育･総合科学学術院教授。
博士（教育学）。1958 年千葉県生まれ。
筑波大学大学院博士課程修了。
茨城大学助教授などを歴任。
ジョン・デューイの哲学と教育学を研究。
著書　『問題解決学習のストラテジー』『子ども学入門』『問題解決学習の授業原理』（いずれも明治図書）など多数。

Q　研究授業の見学に行くと，しばしば発表の場面に出合います。発表も大切ですが，むしろそこに至るまでのプロセスが大切だと思います。発表に至るまでのプロセスを大切にするためには，どのようなことに気をつけるとよいでしょうか。

A　調べた情報を丸写しにした原稿を棒読みする発表からは，子どもたちの学びも育ちもほとんど見ることはできません。価値ある学習活動が遂げられているとは言えません。

ワクワクドキドキしながら，大勢の前で発表をやり遂げるという経験は，子どもたちに自信や意欲を育てる上で重要です。ただし，お仕着せ的に与えられ，やらされる発表ではよくありません。**多くの人に伝えたいという思いから，相手に伝わることを意識して，自分たちで必要な情報を調べ，その意味を考え，方法を工夫して準備していく活動が展開されなければなりません。**そのようなプロセスをたどって発表を成功させることにより，習得した知識や技能は活用できるものとなり，コミュニケーション能力や自ら学ぶ意欲，能力が育つのです。

そのためには，最終的な発表会は学年や全校で，また，保護者や地域の人も招くなど，できるだけ大きな場で行わせるとよいでしょう。そして，そこに至る過程で，小グループ内で，学級内で，あるいはポスターセッション的に，中間発表会を積み重ねさせることが必要です。

ただし，中間発表とは単なる予行演習ではありません。**友だちの意見を聞いて，調べ直したり，考え直したりと，自分の追究を見つめ直して，追加や修正などの必要性が生じることが重要なのです。**友だちからの意見をしっかりと受け止めて，自分にとって有益なアドバイスとして生かすことにより，コミュニケーション能力は育ちます。当然，友だちの発表を聞いて真摯にかかわることからもコミュニケーション能力は育ちます。また，そのようにして事実を調べ直したり，新たな技能を習得したりすることには，その友だちの厚意に応えようという必然性が伴います。だから調べ活動を自分なりに工夫して進めようとします。そのようにして活用を伴って習得された知識や技能は，自分にとって意味のある事実や方法となるのです。

子どもたちに学習能力が育つのは，すなわち，知識や技能が自分のものとして習得され，また，他者との協同的活動に参加・貢献できるコミュニケーション能力，総じて言えば，「21世紀型能力」が育つのは，このようなプロセスを踏まえた発表の経験を通じてなのです。

研究と実践①

気付きをもとに考え，表現できる子どもの育成

～気付きをもとに思考する手立ての工夫と，気付きをもとに話す適切な場の設定～

田代 宗輔（鹿児島県鹿児島市立田上小学校　教諭）

1. はじめに

生活科では，直接体験を重視した学習活動を行うことが大切にされている。それは，低学年の子どもの発達特性として，具体的な活動や体験を通して思考するという特徴があるからである。そこで，具体的な体験を一層充実することで生まれた様々な気付きから，考え表現できる子どもの育成をめざし，気付きをもとに思考する手立ての工夫と，気付きをもとに話す適切な場の設定について研究を進めていくことにした。

2. 研究の概要

（1）気付きをもとに思考する手立ての工夫

対象との出合いやかかわりを通して生まれた，様々な気付きをもとにして，自分なりに考えることができるようにするために，子どもの気付きを可視化し，「見える図（※1）」に分類・整理することにした。この図を使ったのは，気付きを可視化することで，気付きどうしを比べたり，分けたり，関連付けたりすることができ，そこから新たな気付きが生まれることで，気付きの質を高めていくことができると考えたからである。

※1：右図のように，可視化した気付きを整理・分析しながら表現につなげるための図表のこと。

（2）気付きをもとに交流する場の設定

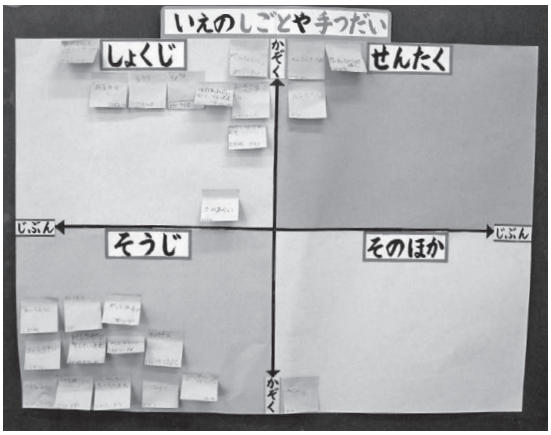
気付きをもとに交流し，子どもの思考力・表現力を高めていくために，話したり交流したりする場を適切に設定することにした。それは，話す場を適切に設定することで，子どもが必要感をもって主体的に話すようになり，気付きが広がったり，新たな気付きが生まれたりして，こちらも気付きの質を高めていくことにつながると考えたからである。

3. 研究の実際

（1）気付きの可視化と「見える図」の活用

ア　ふせん紙とXチャート図

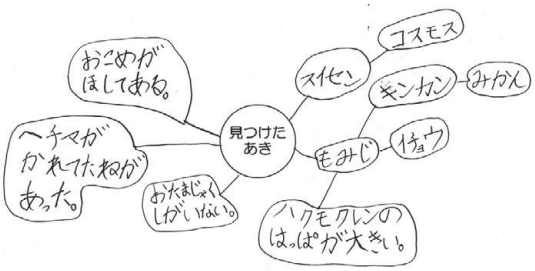
子どもが，家で取り組んでいる手伝いをふせん紙に書き，それを食事・洗濯・掃除・その他に分類し，「見える図（Xチャート図）」に貼って整理した。この活動から，手伝いを頑張っている自分のよさ，友だちが取り組んでいる手伝い，自分にもできそうな新たな手伝いについて考えることができた。



ふせん紙を貼った「見える図（X チャート図）」

イ　ワークシートとウェビング図

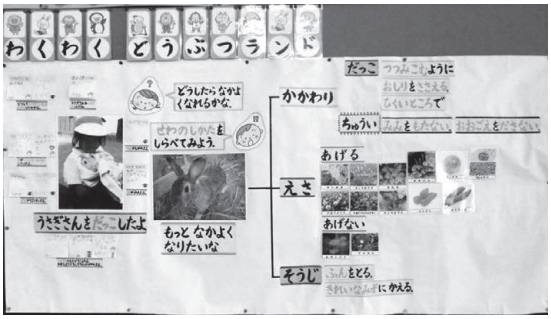
子どもが，秋さがしの校内探険を通して気付いたことを，ワークシートに「見える図（ウェビング図）」を活用して記録した。すると，自分の気付きの広がりや気付きどうしの関連から，「モミジとイチョウは，どちらも葉っぱがたくさん落ちているから同じだね。」などの新たな気付きも生まれていた。



気付きをワークシートに記録した「見える図（ウェビング図）」

ウ　背面掲示と「くま手図」

子どもが，学校で飼育しているウサギともっと仲良くなるために，世話のしかたを，餌，掃除，かかわり方の三つの視点に分けて調べた。これにより，世話のしかたを調べるという課題を多面的にとらえ，視点をもって調べることができた。



ウサギの世話をまとめた「見える図（くま手図）」

（2）教師と子どもの対話・子どもどうしの交流・集団の中での発表の場づくり

ア　教師と子どもの対話の場

子どもが気付きを発表するときには，教師は「どうして～」，「どのくらい～」と問い直すことが大切である。それは，自分の気付きに根拠を示したり，たとえたり，具体的に示したりする必要性が生まれるからである。そうすることで，無自覚であった子どもの単純な気付きが自覚化され，その姿を教師は，称賛したり，価値付け・意味付けの言葉をかけたりすることができる。

具体的には，校内の秋さがしでハクモクレンの葉を見つけてきた子どもに，「どうしてこの葉っぱを持ってきたの。」と問いかけると，「大きかったから。」と答えた。つづけて，「どのくらいの大きさかな。」と問い返すと，「私の顔ぐらい。」と答え，その発表を聞いていた友だちから「本当だ。」，「すごく大きいね。」と認められ，この葉を見つけてきた自分のよさに気付かせることができたのである。

教師と子どもの対話の様子

イ　子どもどうしの交流の場

子どもどうしの交流の場を設定するときには，交流する必要感をもたせることが大切である。それは，気付きをただ伝え合うだけでは，気付きの広がりや深まりが見られないことがあるからである。そこで，交流の視点を示したり，協同的に学ぶ場を設定したりすることにした。

具体的には，子どもどうしで気付きを伝え合う場で，自分の気付きと似ているところや違うところを

視点をもって話し合う子どもの様子

比べながら聞き，それを受けて話すようにした。すると，友だちの気付きをしっかりと聞く必要感が生まれ,「わたしも同じことに気がついたよ。」,「ぼくは，違うところに気がついたよ。」と，考えながら話したり聞いたりする姿が見られるようになってきたのである。

また，子どもどうしが主体的に交流できるようにするために，興味や関心の高い活動内容を中心に活動するようにした。それにより，互いの気付きを自然な雰囲気の中で交流し，友だちと協力して活動することのよさに気付き，自分のよさや友だちのよさにも気付かせることができた。

協力してビニル袋を切る子どもの様子

ウ　集団の中での発表の場

子どもが気付きを集団の中で発表する際は，気付きを共有化する必要性を教師が認識し，意図的に行うことが大切である。なぜなら，集団の中で気付きを発表・共有することで，今後の活動に向けて考える際の視点となったり，活動の流れが方向付けられたりするからである。そこで，子どもの活動の様子を見取った上で，集団の中で発表させるようにした。そうすることで,「わたしもやってみたい。」,「そうするとできるんだね。」という次の活動への意欲へとつながり，発表した子どもは，自分の気付きのよさ，聞いている子どもは，友だちのよさに気付くことができるようになってきた。

集団の中で発表する子どもの様子

4. 成果と課題

（1）成果

○気付きを可視化し,「見える図」に整理したり分析したりすることで，考える機会が増え，考え方を身につけることにつながってきた。

○気付きをもとに話す適切な場を設定することで，必要感をもって学ぶ姿が見られるようになってきた。

（2）課題

○「見える図」を，いつ，どの場面で，何を目的に活用するかを十分研究した上で，指導計画に位置付けていく必要がある。

5. おわりに

今後も，気付きをもとに，考え表現できる子どもの育成をめざして，具体的な活動や体験を充実し，気付きの質を高めながら，自己肯定感や自己有用感を高めることのできる生活科の授業づくりをしていきたい。

研究と実践②　総合

教科間連携を意識した実践

～４年　平和学習を中心に～

北谷　翔太（大阪府摂津市立鳥飼東小学校　教諭）

1. はじめに

本校では，学年ごとに総合的な学習の時間の主要テーマを設定し，系統立てた指導を行っている。４年生で取り上げるテーマは,「平和」である。６年生になると，広島へ修学旅行に行くため，６年生でも改めて「平和」について学習する機会をもっている。そういう意味でも，４年生での学習は，６年生へとつなげる重要な位置を占めている。

例年，６年生が広島へ修学旅行に行っているため，子どもたちの中では,「平和学習＝広島」というイメージがある。もちろん，広島について学習することは重要であるが，ほかにも学ぶべきことはたくさんある。

そこで本年は，太平洋戦争中唯一，国内で地上戦が行われた沖縄県を平和学習の題材に選び,「沖縄調べ」をすることで，平和に対する視野を広げることにした。

また，総合的な学習の時間とともに，６月に行う「校内音楽会」と市内各校から代表クラスが集まって行われる「連合音楽会」においても，テーマを沖縄とし，曲目を選び，音楽で表現することにした。さらに，社会科でも都道府県の位置などを学習し，連携を図ることにした。

本実践は他教科との連携を図ることで，より効果的な学習へとつなげる実践である。

2. 学習の実際

本実践の流れは，右記のとおりである。なかでも中心的な役割を果たした「平和学習」と二つの「音楽会」，そして「参観の発表」について紹介したい。

４, ５月	「音楽会の選曲と練習」
６月	「校内音楽会」
	「沖縄調べ学習・沖縄戦のビデオ学習」
７月	「調べ学習参観発表」
８月	「平和登校日　ビデオ鑑賞」
10 月	「連合音楽会の選曲，練習」
11 月	「連合音楽会」

（1）平和学習について

①「平和って？」

始めに,「平和」という言葉からイメージすることについて話し合うところからはじめた。一番多く出てきた意見は,「戦争がない」というものであった。

次に,「戦争がない」というキーワードから「戦争」という言葉に注目し，再度イメージする言葉を集めた。

子どもの中で「戦争」といえば，広島，長崎の原爆をイメージすることが多く,「沖縄」という言葉が出てくることはなかった。

社会科では，都道府県の学習をする際，沖縄の位置やイメージを広げるために言葉集めをした。沖縄はテレビでもよく取り上げられているため,「暑い」や「海がきれい」,「旅行に行ってみたい」などの言葉が出てきた。

子どもたちは平和学習をするにあたり，そもそも沖縄とはどんな県なのか追究したくなり，文化，歴史，衣食住など沖縄についての調べ学習をすることにした。

②調べ学習

まず，班に分かれて調べ学習のテーマを決めた。調べる方法として，図書サポーターの協力のもと，沖縄に関する本を集め，それぞれのテーマごとに必要なことがらをまとめることにした。まとめたことの中から，さらに「クラスのみんなに伝えたいこと」を班ごとに４～５個ぐらい選び，小見出しを考え，構成させた。

たくさんの本から情報を「抽出」し，それを「整理」する。そして，最後に構成したものを新聞という形で「表現」する。このプロセスの中で，大きく二つの力をつけることをねらいとした。一つは,「沖縄」について知ること。もう一つは，学びのプロセスの中で求められる情報を選び，伝わりやすいように工夫し，伝えることができる力である。

例えば,「沖縄の暮らし」をテーマにした班であれば,「食べもの，行事，服，昔のできごと」などに分け，それぞれに分担して調べたことを班で共有した。そうすることで子どもどうしが高め合い，先述した二つの力をそれぞれが身につけられると考えたからだ。

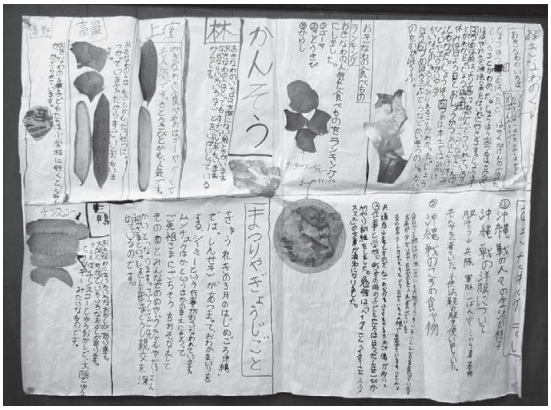
自分で調べるのが苦手な子どもには，事前に何について調べるのかを確認させ，調べ学習がやりやすい資料をインターネットなどで用意しておき，班活動を意識させながら協力してまとめるように支援した。

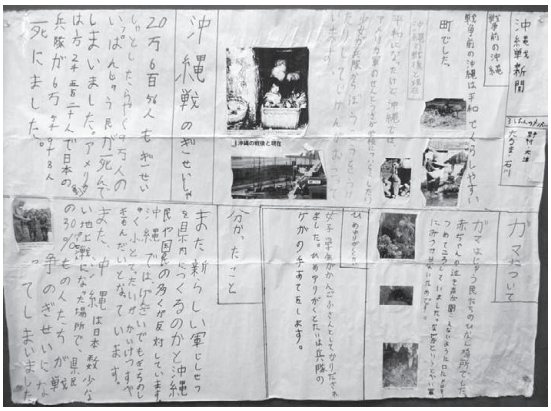
分担して調べたことは，班で模造紙にまとめさせた。その際，どのようなことに気をつけるかについても考えさせ，文字の大きさやバランス，レイアウトについても工夫するよう全体で確認させた。

しかしながら，調べたことをたくさん入れたいという思いがあり，文字が小さくなって遠くから見えにくいという班もあった。この点については，発信者視点ではなく，受信者視点でまとめる指導が不十分だったと感じる。

全体として子どもたちは意欲的に取り組み，本を交換しながら使い，学校の本だけで足らないときは自分の家から本を持って来たり，自宅のインターネットで調べたことをプリントアウトしてきたりした。

また，随時，他の班とも情報交換をしながら取り組むことができた。





（２）音楽会について

①選曲

年度当初より，二つの音楽会で歌う曲のテーマを沖縄に関係する歌にし，子どもたちの学びをさらに深めようと考えた。そのため，子どもたちが一度は聞いたことがあり，身近に感じられる「さとうきび畑」と「島人ぬ宝（しまんちゅ）」を選ぶこととなった。

②歌詞の意味

この二つの歌は，誰もが知っているだろう沖縄にちなんだ楽曲である。子どもたちの中にも，すでに「聞いたことがある」という子がおり，最初から親しみがもてた子が多いという印象だった。

その親しみをもって,「なにげなく」聞いていた歌に込められた物語を知るため，歌詞について考えることにした。

・「さとうきび畑」

まずは，歌を聴かずに曲名からどんな歌かを想像させた。「さとうきび」という植物を知らない子どもが多かったので，社会科で「さとうきび」とはどういう植

物か，どこで栽培されているものかなどを学習することにした。

すると,「さとうきび」は沖縄で多くとれるものだとわかり，おそらく沖縄に関係する曲であろうと子どもたちは理解した。音楽では曲を聴かせる前に歌詞カードを配り，歌詞の意味を考えさせた。子どもたちは，歌詞に込められた思いを感じながら曲を聴いて，合唱の練習に取り組むことになった。

・「島人ぬ宝」

この歌も，まず曲名からどんな歌なのかを考えさせた。中にはすでに知っている子もいたが,「島人」を「しまんちゅ」と読むことを知ると驚く様子が見られた。

曲名からもわかるように，沖縄の方言が歌詞中にも少しではあるが使用されている。そのことを確認してから，この歌も沖縄に関係する歌であることをイメージさせた。そして，歌詞の意味について共有し，曲を聴くことにした。

（3）参観での発表

７月の授業参観は,「沖縄調べ」の発表を班ごとに行った。11月は，連合音楽会の練習の成果を発表することにした。いずれも学年で取り組んでいることを発表するよい機会となった。

７月の「沖縄調べ」については，班ごとの発表のため,「始めと終わりのあいさつ",「説明担当」など，役割を決めて行った。

役割については，練習の中で付け加えたいことがあれば工夫してもよいとした。練習の様子を見ていると，模造紙を手に持って説明するだけではわからないことに気付き,「先生，説明をしているところを指でさしながら説明していい？」など相手意識をもった発言が見られた。また，他の班もよいところは取り入れようとしたため，本番では各班とも練習の成果が出て，上手に発表することができた。

11月は，今までの学習の集大成であり，また連合音楽会に向けての最終調整として「さとうきび畑」と「島人ぬ宝」の発表を行った。どの子も歌詞をイメージしたり，これまでの学習を十分に思い浮かべながらの発表であった。

3. 成果と課題

自分たちが学習してきたことを，参観や音楽会などにつなげて発表するという目標を明示することで，子どもたちの主体的な学習につながった。

そして，総合的な学習の時間と音楽，社会科を連携させることで，ただ調べるのではなく,「学びの必然性」が生まれ，意欲的な活動につながっていったのである。

また，合唱に関しても決められた歌を歌うのではなく，自分たちが学習していることを振り返りながら，その思いを歌に込めて歌うことで，音楽的表現としても内面から高揚していく変化が見られた。

これらのことから，本実践のポイントは,「学びの必然性」と「学びの活用」の二つにあると考える。

その反面，最初の学習から最終的なところまでの期間が長く，中には見通し，理念がもてず，集中しきれない子もいたという課題があった。間延びしたと思う部分には，メリハリをつけるとともに，学習のめあてについて確認，再考する必要がある。

4. おわりに

今回は沖縄に特化して平和について学習してきたが，子どもたちには,「平和＝戦争のないこと」のみならず，様々な形での平和があることを知ってもらいたい。

そして，今後自分たちが生きていく未来について考えるきっかけにしてほしい。また，取り組んだ学習が単発で終わるのではなく，今回のように他の教科と連携を図りながら，今後も効果的な実践が追究できるように考えていきたい。

ナカヤマヒロシのてだてだ 17

ぼく・わたしの「たからもの」… 家族単元の導入として

用意する物

- 画用紙
- デジタルカメラ
- 接着剤
- 学級通信
- フェルトペン
- 原稿用紙

ポイント

①宝ものをいくつか思い出させ，そのうちの一つを決める。
②保護者宛の手紙の内容を子どもに伝え，自分から説明するように話す。
③フェルトペンで書かせる理由…鉛筆は書き直せるが，フェルトペンは失敗が許されないので，集中して丁寧に書くことができるため。

手順

①家にあるもので，自分が一番大切にしている宝ものを思い起こす。
②短冊に，みんなに紹介する宝ものの名称を書いて展示する。
③自分が紹介する宝ものは，どのような宝ものか，そのわけなど，下書きを書く。
④紹介文は，添削した後にフェルトペンで清書する。
⑤保護者宛の手紙を添える。
　文章例「生活科の授業において，自分の宝ものを紹介することになりました。お手数ですが，実物を持たせてください。実物を持参できない場合は，写真に写していただくと助かります。担任」
⑥実物や写真は，デジタルカメラで写して出力し，紹介文とともに貼り付け，発表資料を作成する。
⑦みんなの前で発表する。

中山洋司
（なかやま ひろし）

平和学園 学園長。40年以上のキャリアの中で，幼，小，中，高，大学及び国・公・私立学校すべての校種を経験。編著に「日本の未来はこれで変わる!」（日本文教出版）など。2007年より現職。

幼・保・小

～幼稚園・保育所から学ぶ連携のヒント～

当園は，第二次ベビーブームの中，地域に根ざした保育をモットーに，仲間を大切にできる子どもになってほしいという願いとともに，1975(昭和50)年8月，産声をあげました。木々に囲まれた自然豊かな園庭でのびのびと遊ばせ，勇気，そして創造と思いやりを育みながら，心身の健康づくりに心がけています。

田中浩二　副園長先生

保育方針

まずは，年齢に応じた生活スタイル・生活時間をつくるように心がけています。そして，
①子どもの生命の保持及び情緒の安定を図る。
②生活に必要な習慣や態度を養い，健康の基礎を培う。
③自主，協調の態度を養い，道徳性の芽生えを培う。
④自然や社会への興味・関心を育て，豊かな心情や思考力の基礎を培う。
⑤言葉への関心を育て，話したり，聞いたりする態度を養う。
⑥体験を通じて，豊かな感性を育て，創造性の芽生えを培う。　ようにしています。

特　色

他園ではあまり見られないこととして，以下の四つがあげられます。
○**地域の伝統**…地元山口県出身，金子みすずの詩を題材にしながら，ものにも心があることを知り，そこから感性を育めるようにしています。
○**陶芸教室**…園長の「壊れることがあるものをつくり，落とせば割れることを子どもに伝えたい，そして世界に一つだけの土鈴をつくり，卒園時にわたしたい」という思いから，陶芸を行っています。
○**東北地方との交流**…東日本大震災後に，陸前高田市と大船渡市の子どもたちへ，保育士が手づくりのおもちゃをつくって届けたことがきっかけとなり，今では手紙などで，日常的にお互いの園の様子を伝え合っています。
○**書道教室**…日本の伝統文化の一つとして，月に2回ほど書道の先生に来てもらい，文字をアートと結びつけて作品づくりをしています。

連携のポイント　こうすればうまくいく！

のあ保育園としての連携

地域の保育園，幼稚園，小学校が集まる連絡協議会が年に一度あります。それから，小学校主催で地域の保育園・幼稚園の子どもたちが集まる機会があります。また，散歩がてら小学校をのぞいたり，そこで小学校の先生の許可が得られれば校内に入れてもらったりすることもあります。授業参観もあり，卒園した子どもが，ほぼ一年経ったときに，どんなふうに授業を受けているかを保育士が見る機会があります。

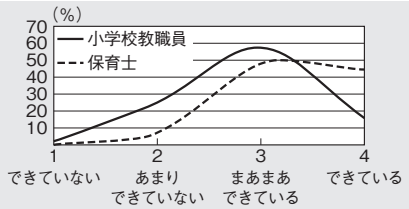
小学校の体育館で１年生と交流

スロープ

第10回
のあ保育園（山口県下関市）

下関市としての連携

保育園から小学校へ進学するときに，保育要録をつくります。すべての市町村でつくっているのですが，市町村によって様式が異なります。下関市の場合は，子どもの情報を一枚の紙に書いて伝えています。その際，できるだけ細かく記述し，子どもの様子が伝わりやすいようにということを心がけていますが，紙だけですべてが伝わるわけではありませんので，昨年度から，互いが話す機会を設けています。保育士から，いずれ小学校へ入学する子どもに対して普段どう接しているのか，どういう子どもを育てようとしているのかを伝え，それから小学校の先生たちが望む子どもの育ちを話してもらい，互いの思いを理解しながら，「少なくともここまではできています。どこの園も同じです」と言えるような体制づくりをしています。さらにその先は各園の特徴を上乗せするような形で保育を進めようとしています。また小学校の先生方も，どこの園に通っていても同様の育ちがあるということがわかれば，少なくともこのことは全員ができる，という思いで子どもたちを受け入れられ，かかわり方も変わってくるのではないかと思っています。



子どもの状態像に対するイメージ

※子どもの状態像とは，食事，排泄，着脱，清潔，安全，人間関係，遊び・運動，社会生活，自然，言葉，表現を指す。
（平成26年 下関市保育連盟資料）

小学校に期待すること

保育士と小学校の先生では，まず人員配置からして根本的に違いますので，段差をなくしていこうと思ったときには，やはり互いのことをよく知らないことには始まらないのではないでしょうか。わたしたちも，自分たちの思いを大切にしながらも，先を見据えることが重要だと思っていますし，小学校の先生方も，子どもたちが入学前の段階でどういう生活をしていて，どんな言葉をかけられているのかを知ることにより，子どもへの接し方が見えてくるのではないかと思っています。

さいごに

市内すべての園が，共通の土台になるものをきちんと育んでいけるような関係を，できるだけ早くつくることが大切だと思っています。

和田先生のひとくちコメント

和田　信行

東京成徳大学　子ども学部特任教授。
東京都生まれ。
都内の小学校教諭を経て，足立区，八王子市の各教育委員会の指導主事，都立教育研究所統括指導主事。
その後，新宿区立四谷第三小学校長兼四谷第三幼稚園園長。
元全国小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会会長を歴任。
専門は幼児教育と小学校教育をつなぐ理論と方法の研究。

1　金子みすずの心

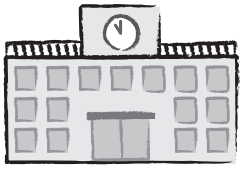
地域の歴史や伝統，地域の文化を生かした保育が行われていることはすばらしいですね。

園児も，金子みすずの「わたしと小鳥と鈴と」や「こだまでしょうか」の心を実践していることでしょう。

2　保・幼・小連携への取り組み方の特色

保・幼・小の保育士や教員が，相互理解をしていこうという共通した姿勢が見られます。保・幼・小連絡協議会はもちろんですが，下関市内で共通化した様式の保育要録に，様々な情報を書き込み，小学校への情報提供を充実させている点はとてもよいです。

スタートカリキュラムの基本は，このような，保・幼・小の情報の共有から始まるといってもよいでしょう。



特色ある実践を求めて

生活・総合を楽しむ味

冬を迎え，振り返ってみると，昨秋はまさしく実りの秋となり，楽しいことがいっぱいであった。好きな秋刀魚や大根，果物がたくさん味わえた上に，わがタイガースがすごい勢いでカープとジャイアンツを圧倒し，日本シリーズに出てしまった。第１戦までその勢いは続いたが，ホークスの武田投手の大きなカーブに翻弄されてからは打線が大失速！最後は後味の悪い幕切れとなった。

この時期は，生活科や総合的な学習の時間においても，子どもがぐんと成長し，活動が充実してくる。その一端を紹介しよう。

地域活性化に向け,励まし合い高め合う子ども

鳥取県境港市立境小学校（松田寛彦校長）は，校区に「水木しげるロード」がある。バリアフリーや幼稚園交流など，どの学年も地域貢献的な活動を展開している。６年生は「元気みなと商店街を盛り上げる」を共通目標に，プロジェクトチームに分かれて取り組んでいる。前年度の６年生の思いを引き継いでいるのである。商店街をPRするためのカレンダーの作成・配布に取り組んでいるチームの中間報告に対して，他チームがアドバイスをする授業を参観した。３色のふせんは,「いいね・納得」〔青〕,「心配・疑問」〔赤〕,「代案」〔黄〕で使い分けられている（わたしは，ワークショップ型の研修や学習の全国統一基準作成のために［笑］，赤〔というよりは桃〕と黄を逆の意味で使うことを勧めている）。各チームからはデザインや費用，部数，配布場所などに関して，様々な要望やアイデアが寄せられた。「町をもっと元気にしたい」という思いが，ひしひしと伝わってきた。

この日の振り返りカードの内容を一部紹介したい。「この話し合いで出てきたことすべてをヒントとしてやっていくことによって，話し合いをする前よりも数倍は達成感があがっていくと思う。･･･」,「厳しい意見がたくさんあったと思うけど，それを乗り越えてよいものがつくれます。･･･」,「カレンダーチームの話し合いと自分たちガイドブックチームの意見を照らし合わせてみると，今回もたくさんの課題が見つかりました。…」など，まさに，話し合いを通して協同的に問題解決をしていく価値に気付いていることがわかる。

町の人を災害から守りたい

高知県には南海地震と津波を想定し，総合的な学習の時間で防災教育に取り組む学校が多い。田野町立田野小学校（野村倫子校長）の５年生も,「田野の宝（いのち）を守る・つなぐ」に取り組んでいる。この日は，事前に地域の人から集めておいた課題に対して，自分たちにできることを見直す話し合いだった。それから，各自の考えをペアでまとめて発表した。「逃げているときに助け合いができればよい」に対しては「近所の人と普段から交流を重ねて仲良くなる」,「避難場所に逃げていたら道が通れなくなっていた」に対しては「複数のルートを考えて伝える」など，八つの課題についてそれぞれ具体的な対応策を考えた。その後，役場の防災担当者から「身近な災害で考える」,「いつも通っているところを視点を変えて見る」などのアドバイスを得た。子どもたちは防災マップづくりを計画しているが，大人やプロには到底勝つことはできない。子ども目線の工夫を期待したい。

事後検討会では，東京都新宿区立大久保小学校の「エビデンスベースの授業の見方ワークショップ」※)を導入している。複数の教師がカメラを片手に参観し，子どもの具体的な姿を踏まえた協議を行い，その成果をホワイトボードで整理するという手法である。

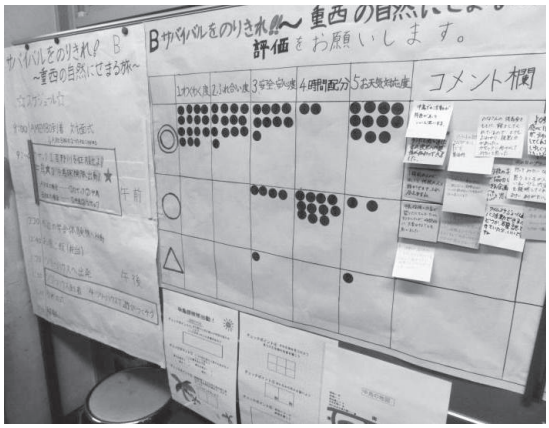
わいの旅 その⑰

村川　雅弘
MASAHIRO MURAKAWA

鳴門教育大学大学院 教授。
専門は教育工学，カリキュラム開発，生活科・総合的な学習。日本教育工学会理事，中教審専門部会委員などを歴任。

子どもたちによる校外学習お勧めプラン

徳島県美馬市立重清西小学校（福山義夫校長）も地域の特色を生かした総合的な学習の時間を展開している。３年生は地域の人たちと協力してつくった「ひまわり迷路」，４年生は地域防災，５年生は特産物である蚕と竹，６年生は地域にある「水辺の学舎」を有効活用する計画づくりにそれぞれ取り組んでいる。様々な思考ツールを活用して，話し合い活動を活性化させようとしているのも特色の一つである。徳島県教育研究大会当日，５年生は３年後に統合する郡里（こおざと）小学校の児童と，モバイル機器を活用して互いの町の竹自慢を行っていた。小規模校で限られた数の児童がそのまま進級する学校では，大いに奨励したい取り組みである。また，６年生は他校の児童や教師を対象に行ったアンケート結果を踏まえて，自分たちが立てた「水辺の学舎」利用プランを熱く語り，参観者から「わくわく度」，「ふれあい度」，「安全・安心」などの観点を設けてコメントを得ていた（写真）。手づくりのオールカラーのパンフレットも魅力満載である。県内他校の次年度以降の校外学習に，６年生の子どもたちが考えたプランが採用されることを期待している。



４年生の教室で面白いものを見つけた。「MY防災マニュアル」である。各自が自宅の場所や家族構成等を踏まえて，避難方法や避難場所，連絡方法などをまとめている。手にした作品には，「（避難場所ですること）心を落ち着かせる。家族みんながいるか，確認する」，「（気をつけること）近所の人のところに行く。妹と弟を連れてくる。」などが書かれていた。行政には真似をすることのできない貴重なマニュアルである。

学校をあげての防災教育

横浜市立北綱島小学校は防災教育を核にした総合的な学習の時間，「横浜の時間」（総合）に取り組んでいる。昆しのぶ校長先生（昨年度まで市内大岡小学校校長）の依頼で，防災教育のカリキュラムマネジメントにかかわっている。訪問した日，１年生の生活科では，登下校を見守ってくれている学援隊の方へのインタビューの報告を通して，その人たちの思いを理解する学習，３年生の総合的な学習の時間では，校区地図を活用した町の安心・安全の取り組みに関する発表を通して，地域を守る人の存在を理解する学習に取り組んでいた。６年生の総合的な学習の時間では，「めざせ！北綱防災レンジャー」という共通テーマのもと，チームで様々な課題に取り組んでいる。この日は，バケツリレーチームの提案を踏まえて，一列，ジグザグ，二列の三つのリレーの方法について，メリットとデメリットを整理し話し合った。

※三田大樹「エビデンスベースの授業の見方ポイント WS」，村川雅弘編著『「ワークショップ型校内研修」充実化・活性化のための戦略&プラン43』，2012

生活・総合への提言

～今一度，生活科を見つめ直そう～

近藤　まり
三重県四日市市立泊山小学校
教頭

平成元年の小学校学習指導要領に生活科が新設されて早二十数年が過ぎた。その間，学習指導要領の改訂が２回あり，生活科も現場からあがってきた問題点を修正しながら，少しずつ進化を遂げている。

しかし一方で，誕生時の「熱気」が感じられない，授業内容もいくらかマンネリ化しているのではないかという声も聞かれる。

そこで，もう一度原点に戻り，生活科を見つめ直してみたい。

1　生活科に込められた願い

平成元年発行の小学校学習指導要領解説「生活編」の第１章 生活科の新設は，次のような言葉で始まっている。

「平成元年の学習指導要領の改訂において，小学校低学年の教科構成が改められた。生活科という新しい教科が設置され，それに伴って従前の低学年における社会科と理科は廃止されたのである。戦後 40 年にして，小学校では初めて教科の改廃がなされた。それだけに，この改訂は，かつてなかった小学校教育の大きな変革であるということができる。」

このように，生活科誕生の背景には，ただ単に，低学年の社会科と理科を合体させた新教科として誕生したものではなく，知識偏重に傾き過ぎた教育の中で育てられなかった部分への対応があった。また，この時期の子どもは，発達段階的に思考や感情の未分化な段階にあり，幼児教育から小学校教育へとスムーズな移行をしなくてはならない，いわゆる「小１プロブレム」への対応でもあった。

思い起こしてみると，生活科が問題提起していたことは何だったのか。それは，次の三つだったように覚えている。

まずは，学校教育における体験の重視ということである。バーチャルな世界に生きる子どもたちにとって，体得の場と機会が著しく減少している。このような状況にあって，学校は依然として伝統的な知育中心の教育でよいのかが問われていたのだった。そして，あれから二十数年，事態は更に悪化している。

次に，個を育てること，個性重視の教育を求めているということである。生活科は，身近な環境への気付

きとともに，自分自身への気付きを重視する。この気付きの核心は，自分自身の長所を見出し，それを友だちや先生に認めてもらい，一人ひとりの子どもにやる気と自信をもたせることである。

そして三つ目は，これまでの授業のあり方を変えたいという願いである。教師主導の授業から，子どもの思いや願いに寄り添い，子どもが主役の授業へと変えたいという願いが込められていた。

2　生活科授業診断の四つの視点

さてここで，日々実践している生活科の授業を，生活科の原点に戻って，次の四つの視点で診断されることをおすすめしたい。

一つ目の視点は，教師はどこにいるかということである。伝統的な授業スタイルでは，教師は，1時間中，黒板を背にして学級全体に話しかける。こうした教師主導の一斉指導では，集団にウェイトがかかり，個が軽視されがちになる。自校の生活科がこの反省に立っているかを考えてほしい。

二つ目の視点は，子どもが動いているかということである。授業の中に，聞く，書く，発表するだけではなく，調べる，育てる，つくる，遊ぶ，相談する，表現するなどの活動をふんだんに取り入れ，連続・発展していくよう支援することが大切である。

三つ目の視点は，どこで活動しているかということである。通常の授業は，教室の中で行われる。生活科ももちろん教室での授業もあるが，校内はいうまでもなく，校外まで学習の場は広がることになる。諸感覚を使った活動や体験を通して，自然や人に出会わせていきたい。

四つ目の視点は，教科書のカリキュラムや昨年度の指導計画をそのまま使用していないかということである。生活科では，全国一律の内容を求めず，それぞれの学校が子どもや地域の実態に合わせてふさわしいものを作成することが大切である。学校ごとに，また年度ごとに計画や展開が異なるのが当然である。

マンネリ化しないためには，常に上記のような授業診断をして，改善し続ける努力が欠かせないと考える。

3　幼児教育から学ぶこと

昨年の秋，ある幼稚園で研究発表会があった。子どもの実態として，同じ空間にいても既製の玩具で一人で遊ぶことに慣れた状況があり，直接的な体験の不足が指摘されていた。また，自己主張はするものの，相手の立場に立てない子どもの姿があった。

そこで，この幼稚園では子どもが自ら環境にかかわって主体的・創造的に遊びを展開していく次のような「豊かな遊び」が重要であると考えていた。

・主体的に周囲の環境にかかわり，心や身体をはたらかせることができる遊び。
・失敗を恐れず，何度でも繰り返したり，自分の思いを自由に試したりできる遊び。
・見守り，共感してくれる大人や友だちがいて，安心して繰り広げられる遊び。

こうした「豊かな遊び」を通して，①試したり，探究したりする力，②ものや物事に対してしなやかに対応していく力，③考えたことを表現する力，などを育もうとしていた。

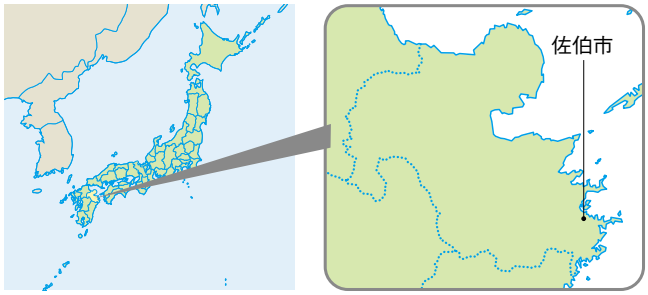
まさに，生活科でめざしている「自立への基礎」，「思考力・判断力・表現力の育成」につながるものである。おおいに参考にしたいところである。

学力向上が叫ばれる中，全国学力・学習状況調査で強調される「活用力」が，真の学力，すなわち「生きる力」の育成をねらうものであれば，今こそ生活科を起爆剤にしながら授業改善を推進し，教師も子どもとともにわくわくしながら取り組める授業を展開していきたい。

生活科の原点に立ち返り，今一度，生活科の授業を見つめ直すことが，楽しい学校づくりにつながるものと信じている。

佐伯（さいき）ごまだしうどん

佐伯ごまだしうどん大作戦　代表　岩崎裕祐



祖母から母へ，母から娘へと伝承された味

「佐伯ごまだしうどん」とは…茹でたうどん麺に「※佐伯ごまだし」とネギなどの薬味をのせ，それにお湯をかけて食べる，この地域独特の「うどん」のことである。

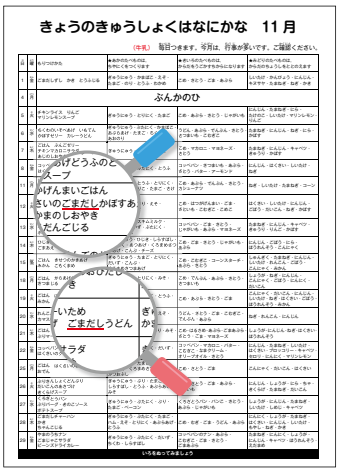
この「佐伯ごまだしうどん」が伝わる大分県佐伯市は，日豊海岸国定公園に指定された「豊後水道」という豊かな海を擁し，昔から「佐伯の殿様浦でもつ」と言われるほど，水資源に恵まれた水産業の盛んな地域である。しかし，その多くとれる魚介類の中でも，いわゆる「雑魚」と呼ばれる値がつかない魚も多くとれることから，漁師の妻たちはこの雑魚を生かして効率的に収益につなげる方法がないものかと考えたのである。この「佐伯ごまだし」は余った魚があったときにつくり，昔から味噌や醤油などと同様に壺に入れて冷暗所に保存し，必要なときに必要なだけ使うという優れものとして重宝されてきた。このように使い方も簡単で，野菜とあえたり，そのままご飯のお供としてのせて食べたりと，用途も多い便利な万能調味料である。しかし現在では，「佐伯ごまだしうどん」として食べるのが一般的で最もポピュラーな食べ方となっている。

このような形で，一般的には家庭で食べるものとして伝わってきたものではあるが，明治時代の終わり頃，魚の積み卸しなどが頻繁に行われていた港周辺の食堂等では，すでにメニューとしてあったと言い伝えられている。また，現在はそれを容器に詰めた商品がお土産として多数流通している。それをお持ち帰り用の商品として，1967（昭和42）年に市内の「かわべ鮮魚店」が考案し，店頭で販売したのが最初である。

伝統を守り，そして未来へ

現在は，この「佐伯ごまだしうどん」の味やつくり方などをしっかりと継承し後世へ伝える役割の「佐伯ごまだし暖簾会」と，「佐伯ごまだしうどん」を旗印として様々なまちおこし活動に取り組む「佐伯ごまだしうどん大作戦」の

両団体が地域を牽引している。最近では，地元小学校へ出向いて行う出張授業の要請が多くあり，前段で述べてきた歴史やルーツ，これを旗印としたまちおこし活動の紹介や「佐伯ごまだし」のつくり方などについての授業を行っている。また，食育の観点から栄養士の先生の協力による，地元小学校の給食へのレシピの取り入れも多数あり，様々な機会を通じ「佐伯ごまだしうどん」が学習用の教材としても地元の子どもたちとのつながりを見せている。

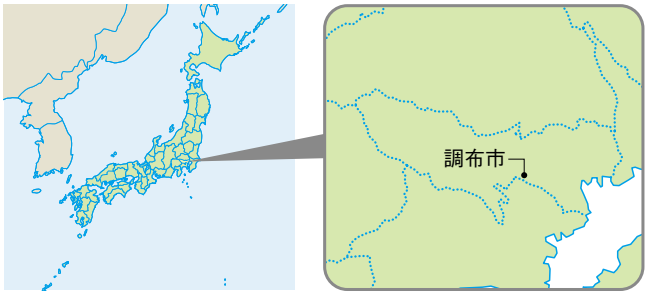


佐伯ごまだしうどんのレシピ

①うどんを茹でて器に入れる。
②適量の※佐伯ごまだしをのせる。
③適量のお湯をかけて薬味などをのせる。
※佐伯ごまだし…焼いた魚の身に醤油などの調味料とゴマを混ぜてペースト状にしたもの。

どんど焼き

調布市 下佐須青年会　会長　林田堯瞬



どんど焼きって何？

調布市は，東京都心から西へ 15km ほどのところに位置し，23 区に接している。都心に近いわりに緑が多く，古くからあるところと，新しい街並みが混在する活気のある町である。さて，まずはどんど焼きの解説から…。

どんど焼きは，小正月（1 月 15 日）に河原や村境の田畑などで，家々から持ち寄った正月飾りや書初めなどを 1 か所に集めて燃やす火祭りで，全国的に催されている。地域によって「左義長」，「とんど焼き」など，呼び方は様々である。

正月は，各家庭に歳神（歳徳神）を迎え入れるため，門松・注連縄・鏡餅等を飾りながら過ごし，歳神を炎とともに見送る行事である。

また，燃やした残り火で団子を焼き，これを食べると一年間無病息災に過ごせる力を授かると伝えられており，これを「お歳魂」と言い，新年に子どもたちに与える「お年玉」の原型とされている。

▲燃やした残り火で団子を焼く様子

失われていく行事

昔は，どこの村々でも行われていたどんど焼きも，ほとんど見ることがなくなった。都市部では住宅が密集し，火をたいて燃やす場所がなくなり，地方では高齢化や過疎化が進み引き継ぐ者がいなくなり，減少しつつある。

また近年は，消防法やダイオキシンの問題，近所からの苦情等が拍車をかけ，ここ調布市内では現在２か所のみの開催となっている。

復活！地域の伝統を受け継ぐ

調布市佐須地域では，失われたどんど焼き行事を，青年会が中心となり，地元小学校・ＰＴＡ・児童館・自治会・消防団等，地域の様々な団体が協力し合い，23 年前に復活した。

まず，行事の２日前に竹を組み，だるまや松飾りなどで飾り立てた櫓を造り，当日家々より持ち寄った正月飾りを櫓の周りに配置する。この時，燃やせるものと燃やすことのできないものを分別することも，地主や近隣に対する大事な配慮である。

また，12 歳を迎える年男・年女の子どもたちが松明を持ち，一番の見せ場である点火式の役を担う。どんど焼きへ積極的に参加することにより，行事を次世代へ引き継ぐ機会としている。

幸い当地域は，取り組みの効果とともに，行事を行える十分な場所を確保しつつ新興の宅地も増え，年々賑わいを増している。

三年前には，調布市からも表彰され，より一層，伝統を受け継いでいく地域の人たちの励みにもなっている。

▲年男･年女の子どもたちによる点火式

大好き！わたしたちの町！ 見て見て！発見がいっぱいだよ

山梨県笛吹市立一宮西小学校
教諭　青柳 仁美

キラキラたんけんたい
～クイズ形式～

わくわくたんけんたい
～紙芝居風～

子どもたちは，家庭や学校でのつながりが中心で，社会へのつながりが少ない。２年生にとっては，本単元の町たんけんが本格的に社会とかかわる第一歩となる。見学やインタビュー，メモを取るなどの活動も初めての経験である。４月，子どもたちに「自分の住んでいるところのいいところ，おすすめのところ，友だちに自慢したいところ，自慢したい人などあったら，調べてきてね。」と伝えたところ，漠然と，自然や建物，場所などを書いてくる子が多かった。そこで，２年生になって初めての授業参観の折，学区の地図を用意し，自然や建物などおすすめの場所を保護者と一緒に地図で確認し，シールを貼るなどの活動を行った。すると，「わたしの家の近くには，土手があって花がいっぱい咲いています。歩くと気持ちいいです。是非来てください。」，「うちはお店をやっています。子どもも飲めるコーヒーがあります。おいしいです。」，「家の近くにおいしいパン屋さんがあります。」，「ぼくが通っている英語教室は楽しいです。英語を楽しく教えてくれます。」，「わたしが通った保育園は神社の近くにあって，いつも散歩で神社に行きました。」など，おすすめのところがたくさん出てきた。発表を聞いていた子どもたちは，「〇〇さんの家って遠いなぁ。」，「英語教室に行ってみたい。」等の声が聞かれるようになった。

こうした子どもたちの声をもとに，「自分が住んでいる地区以外のところ，友だちのおすすめの場所や建物，人のところに行って，見たり聞いたりしてこよう。」という学習を展開するようにした。学区が広く，子どもたちの行ってみたいところも様々であったので，子どもたちの願いをかなえられるよう，保護者に引率ボランティアの話をし，協力を呼びかけた。「他の地区

なかよしたんけんたい
～テレビニュース風～

おもしろたんけんたい
～大型新聞風～

おたからたんけんたい
～大型紙芝居風～

ドキドキたんけんたい
～新聞形式～

を知りたい。」という子どもたちの思いを実現するため，なるべく多くの場所を見学できるように設定することにした。実際に，見たり，聞いたり，さわらせてもらったりした体験をもとに，人や場所とかかわる過程でたくさんの気付きを実感し，人の優しさやあたたかさも感じられたようだ。

探検後は，調べたことや見てきたこと，聞いてきたことをまとめ，他のグループへの情報発信のしかたを考えさせ，発表会に向けてまとめ方を工夫させた。探検したことをまとめて伝えることは，今回が初めての２年生。表現方法については，できることをできる範囲で行い，これからの学習の中で様々な方法を学んでいけるように支援した。地域や人との触れ合いがこの活動で終わるのではなく，「また，行ってみたい。会いに行きたい。」,「発表を聞いて行ってみたくなった。」などの子どもたちの発言から，積極的に地域とかかわっていこうとする気持ちがもてることを期待した。全部で六つのグループは，それぞれ調べたことを**クイズ形式**にして知ってもらおうとしたり，**大型紙芝居風**や**大型新聞風**にしたり，段ボールでテレビをつくって**テレビニュース風**にしたりと，調べてきたことを楽しそうにまとめていた。ミニ発表会で，他のグループのまとめ方や発表のしかたを参考にし，保護者を呼んでの発表会では，発表のしかたを工夫し，隣のクラスとの合同学年発表会では，さらにまとめ方を工夫していた。伝え合い・交流学習の中では数多くの気付きがあり，それをもとに次の発表のしかたや内容を工夫し，発展させていた姿がとても印象的だった。

資料館へアクセス

御食国（みけつくに）若狭おばま食文化館

「日本人らしく生きるために ～御食国若狭おばまの生涯食育～」

中田 典子（小浜市企画部食のまちづくり課　課長補佐）

「食のまちづくり」と「生涯食育」

福井県の南部に位置する小浜市は，人口約３万１千人余りの小さな市である。目の前には，日本海側唯一のリアス式海岸である若狭湾が広がり，一年を通じて様々な魚が水揚げされる。飛鳥・奈良の時代には，豊富な海産物や塩を朝廷に献上した御食国（みけつくに，御食：天皇の食材）の歴史があり，江戸時代から近代にかけて，海産物を京都へと運んだ道は「鯖街道」として現在も親しまれている。

2000（平成12）年８月，地域資源を生かしたまちづくりを進めようと考え，「御食国」の誇れる歴史と現在も連綿と受け継がれている豊かな「食」に着目した。そして「食」を重要な施策の柱としたまちづくり，いわゆる「食のまちづくり」を開始，翌年９月には，全国で初めて「食」をテーマにした自治基本条例である「小浜市のまちづくり条例」を制定した。この条例においては「食育」を重要な分野として位置付け，人は命を受けた瞬間から老いていくまで生涯を通じて食に育まれることから，「生涯食育」を提唱し，ライフステージに合わせた食育事業を数多く実施している。

食の魅力を諸感覚すべてで味わえる「御食国若狭おばま食文化館」

食のまちづくりの拠点施設として，2003（平成15）年９月に「御食国若狭おばま食文化館」（以下「食文化館」）を開設した。

１階のミュージアムスペースには，日本の食文化に関する600種類を超すレプリカや江戸時代の暮らしを表した人形，ジオラマ，写真パネルが並ぶ。例えば，地域の特色が色濃く現れる「全国のお雑煮」は，人気のコーナーであり，多くの来館者がここで足を止めて時間を過ごす。2015（平成27）年３月にはリニューアルオープンを予定しており，壁面グラフィックに「魚図鑑」や「日本の年中行事と食について」などがダイナミックに展示される予定である。ハンズオンの手法も採用することで，一層子どもたちに喜んでもらえる食文化館となるだろう。

また，この館最大の特徴は，ミュージアムスペースに「キッチンスタジオ」が併設されていることである。食や食文化を見て読んで学ぶだけでなく，地元の主婦たちからなる市民グループの指導のもと，実際に自分でつくり（料理），味わう（食べる）ことができるのだ。つまり，食文化館は食の魅力を，諸感覚すべてで感じ，学び楽しめる全国唯一の施設なのである。

２階には，若狭塗箸や若狭和紙などの伝統工芸の体験ゾーンが設置されている。特に若狭塗箸は，塗箸生産全国シェア80％を占める市の重要な産業である。食文化館では，箸の歴史や文化，作法を学ぶとともに，伝統工芸士指導のもと，世界に一つだけの「マイ箸」の制作もできるのである。さらに，小浜市内の小学生は６年生の２学期になると，全員が自身の卒業証書用の若狭和紙を漉（す）

きに来館してくれる。

このように，様々な角度から日本の食や食文化を学び体験できる食文化館であるが，観光施設という側面だけでなく，小浜市の食育事業の拠点施設としても，これまでに様々な食育事業を生み育てている。

子どもの食育　キッズ・キッチン

市では食文化館の開館を機に，市内の成長期の子どもたちが一人残らず食育を学び体験できる仕組みとして「義務食育体制」を整備した。例えば，食文化館では，ベビー・キッチン（2～3歳），キッズ・キッチン（4～6歳），ジュニア・キッチン（小学5・6年生），中学2年生の家庭科調理実習が行われ，さらに保育所・幼稚園，小・中学校において，それぞれの立地条件や特色を生かした農業体験や水産体験がカリキュラムに組み込まれている。

食文化館での食育事業の一例を紹介しよう。「キッズ・キッチン」は，「料理**を**教えるのではなく，料理**で**教える」。つまり，料理を手段とした教育プログラムと位置付けている。釜戸炊きご飯，丁寧に出汁をとり，旬の地場産食材を何種類も入れた味噌汁をつくり，手摘みの釜煎り茶もいれる。魚をさばく機会もあえて多くもつ。鮮魚をさばき，血や内臓に触れながら，「食べるということは命を頂くこと。命を頂いて自分たちは生かしていただいている。」ということを実感してほしいのである。子どもたちは，本物の包丁を使い，火の管理もするが，しっかりとルールを守るので，怪我をすることなく，達成感や満足感，協調性や感謝の気持ちなど，多くのことをこの体験から獲得してくれる。

オリジナルの食生活指針

2013（平成25）年度には，小浜市オリジナルの食生活指針「元気食生活実践ガイド」を作成した。

このガイドブックでは，科学的根拠に基づく栄養学を中心に，写真や事例なども盛り込みながら詳しく述べている。そして，特筆すべきは，「身土不二（しんどふじ）」（注1）や「一物全体食（いちぶつぜんたいしょく）」（注2）など，東洋的な考え方を随所に盛り込んでいることである。

また，食生活のあり方にとどまらず，郷土の偉人である杉田玄白の「養生七不可（ようじょうしちふか）」（注3）を用いて気持ちのもち方について触れたり，「いただきます」，「ごちそうさま」という日本のすばらしい習慣の意味についても触れ，日本人が昔から大切にしてきた丁寧な暮らし方そのものが健康につながると書いている。食文化館では，このガイドブックを用いた食育講座も開設している。

食育ツーリズム

最近では，これらの魅力ある食育事業を地域外の皆さんにも提供しようと，「食育ツーリズム」に力を入れている。

小浜市には，食文化館をはじめとして，食を学び体験できる環境が整備されており，指導のノウハウやスタッフも備えている。今後，多くの方に「食育ツーリズム」として小浜に訪れていただき，小浜市民同様に食育を学び体験していただきたいと思っている。

注1　身土不二
人間の身体と土地は切り離せない関係にあり，育ったその土地のものを食べるのが健康によいという考え方。

注2　一物全体食
食材を丸ごと使用し，食することを意味する仏教用語。

注3　養生七不可
杉田玄白が提唱した健康長寿のための七つの心得。

わたしの学校の特色

北海道札幌市立南月寒（みなみつきさむ）小学校

―夢を育む　あたたかくて　楽しい学校―

校長　中井　早江子

本校は，札幌市の南東部，地下鉄東豊（とうほう）線 月寒中央駅に近い豊平区月寒地区と西岡地区の住宅街に位置している。月寒地区は，高台で見晴らしがよく，札幌の中心部を眼下に見渡せ，かつては「軍のまち」として発展した。また西岡地区は，良質な水と日当たりのよい広大な土地を利用して，リンゴなどの農作物が栽培されていた歴史ある町である。本校校舎も眼下に札幌の街を見下ろし，遠くは藻岩山（もいわやま）や手稲山（ていねやま）へ沈む美しい夕日を望める環境にあり，現在611名の児童が元気に通学している。

本校外観

あたたかな心を育てるギンナン活動

異学年の子どもたちのつながりを深め，学校への愛着心をもたせ，あたたかな心を育み，楽しく安心して学校生活を送ることのできる環境をつくることをめざし，「ギンナン活動」を実施している。その名は，校木がイチョウであることから名付けられた。高学年がリーダーシップをとって，「遊び」，「給食」，「清掃」，「遠足」，「チャレンジ集会」等々，年間を通じて活動することで絆が深まり，毎日の学校生活に子どもたちの笑顔があふれている。これらの活動を通して，思いやりの大切さを実感し，相手意識を育む。そのことが，学級や学年の充実した学習活動にもつながっている。

ギンナン遠足

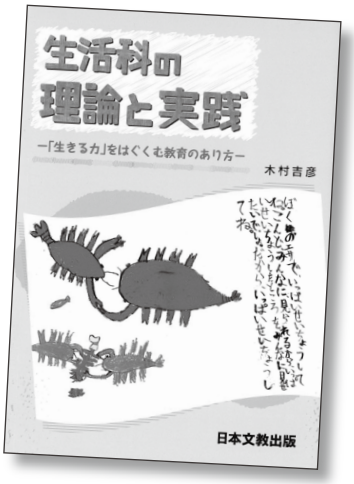
地域自慢のわくわく体験

地域をフィールドとして学習してきた，生活科や総合的な学習の時間の内容を見直す時期にあたり，「子どもたちの夢を育む体験活動を」と，地域自慢のスポーツ施設を活用したスケート体験やカーリング体験を取り入れることにした。北国定番のスキー学習に加え，これら新しい体験に子どもたちは真剣に取り組んでいる。さらには，これまで実践してきた地域の美化活動や福祉の活動を中心にした学習も継続していくことで，自分たちの住む町である月寒や西岡が，そして札幌が大好きな子どもたちに育てていきたい。

わくわくカーリング体験

好評発売中

日文の書籍シリーズ



生活科の理論と実践

ー「生きる力」をはぐくむ教育のあり方ー

生活科誕生より約20年、その歴史を振り返り、今一度生活科の本質を改めて見直し、新しい生活科の姿、教科特性を論じる。理論を具体的に補完する実践例も収録。若手からベテラン教師まで必携の一冊。

編著 木村吉彦（上越教育大学大学院）

定価 2,160円（本体2,000円＋税８％）

A5判　240頁　ISBN978-4-536-60058-3

学習指導要領解説

生活科 新たなるステージへ

理論重視ではなく、具体的な実践イメージから学習指導要領のポイントがつかめる解説書。

編著 村川雅弘（鳴門教育大学）
和田信行（東京成徳大学）
中山洋司（平和学園）

定価 1,944円（本体1,800円＋税８％）

B5判　192頁　ISBN978-4-536-60003-3

お求めは、書店、ブックサービスでお願い致します。

※商品のお問い合わせは、お手数ですが、裏面所在地より小社大阪本社業務部へお願い致します。

スマートフォンやタブレットをかざすと動画が楽しめる!

1. スマートフォンまたはタブレットで,ストアアプリを起動します。
2. 「カザスマート」で検索し,アプリをダウンロード。
3. 「カザスマート」アプリを立ち上げます。
4. AR マークがあるページで紙面全体にかざすと,動画が始まります!

ANDROID APP ON Google play

Download on the App Store

★表紙裏（い～め～る），P.26（ご当地料理紹介），P.27（わが町オススメ行事）で視聴できます。

※動画は，2015年５月31日まで視聴することができます。

Dr.小林の これなあに？

写真の達人，小林先生が，撮りためた写真の中から
とっておきを紹介します！

小林 辰至

上越教育大学大学院 教授。1952年，岡山県生まれ。専門は理科教育学。タンポポの教材化に関する研究で，兵庫教育大学から博士(学校教育学)を取得。散歩に出かけて足もとの自然をカメラにおさめるのが趣味。

スギナとツクシ

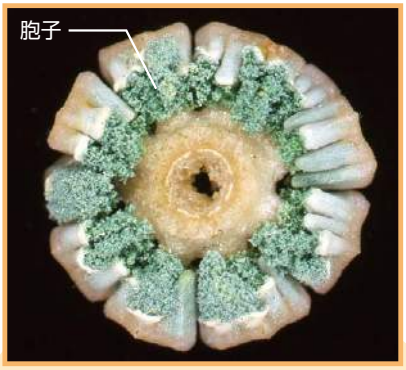
春になると土手などにツクシが出ます。ツクシは胞子をつくって飛ばすはたらきをします。ツクシが枯れると光合成を行うスギナが伸びてきます。ツクシとスギナは地下茎でつながっています。

①春の陽射しを受けて土手に顔を出したツクシ

②地下茎でつながったツクシとスギナ

③杉林のように見えるスギナ

④胞子を飛ばす前のツクシ



⑤胞子を飛ばしていないツクシを輪切りにして放置しておくと，胞子が出てきます。

⑥胞子を顕微鏡で見てみました。糸のようなもの（弾糸（だんし））が四方に伸びています。湿度が高いと弾糸は，緑色に見える部分に巻き付きます。そして，乾燥すると再び伸びて，もとに戻ります。

小林先生への質問，ご感想，先生の写真を授業で使いたい！
などなど，お便りお待ちしております。

日本文教出版 HP ➡ 問い合わせフォーム もしくは，連絡先を記入の上，
FAX(03-3389-9359，生活科編集部宛)にてお寄せください。

生活&総合navi vol.70

日文教育資料[生活・総合]
平成27年(2015年)2月27日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL：06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

表紙イラスト カワツナツコ

CD33256

日本文教出版 株式会社
http://www.nichibun-g.co.jp/

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18-7F・B
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690